

蓮華寺跡発掘調査報告

～度会郡度会町伊崎～

2020(令和2)年12月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は、一级水系宮川水系止山東谷通常砂防事業に伴う蓮華寺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査地は、三重県度会郡度会町棚橋に位置する。
- 3 発掘調査は、三重県教育委員会が三重県県土整備部から依頼を受けて実施した。発掘調査および整理作業の経費は、三重県県土整備部から執行委任を受けた。
- 4 発掘調査期間は平成31年4月17日～令和元年6月14日である。
- 5 発掘調査（範囲確認調査、立会調査）の調査面積は、計86m²である。
- 6 調査の体制は以下の通りである。
調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課 主査 櫻井拓馬
- 7 本書の編集は櫻井があたった。
- 8 調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。
- 9 発掘調査及び庭園の現況調査にあたり、宗教法人蓮華寺の協力を得た。

凡　　例

- 1 本書では、国土地理院発行の1:25,000数値地図（「国東山」「伊勢」相当、平成18年10月発行）、三重県共有デジタル地図（2020）の1:5,000地形図（06PF743番）を用いた。三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（令和2年4月1日付三総合地第2号）。
- 2 標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。範囲確認調査は地表面（GL）からの深度を示した。
- 3 本書で用いた座標は世界測地系に基づくものである。方位は第VI座標系の座標北で示した。
- 4 土色の標記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1967年初版）に掲めた。遺物観察表における土器等の色調表記もこれに従う。
- 5 遺物実測図の縮尺は1:4である。
- 6 註は各節の文末に付し、参考文献も註に記した。
- 7 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
 - ・実測番号は、当センター所蔵の遺物実測図番号である。
 - ・色調は外面のみ、標準土色帖の色名（「黄橙色」など）を記す。マンセル記号の表記は省略した。
 - ・土器の残存率は全周を12分割して示す（例：口縁部3/12）。1/12以下のものは「口縁部片」など。
 - ・口径・底径は完存ないし復元の値である。実測時の接地面ではなく、外周で計測した値とした。また、土師器皿の底径は記していない。高さ・幅等は残存値である。
- 8 写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応する。遺物写真は縮尺不同である。

目 次

例言・凡例	i
目 次	ii
I 前 言	1
1. 調査に至る経緯	3. 文化財保護法にかかる諸手続
2. 調査の経過	
II 位置と環境	3
1. 遺跡の位置と地形	2. 蓮華寺の沿革
III 遺構と遺物	5
1. 範囲確認調査	調査結果一覧表
2. 工事立会	遺物観察表
3. 出土遺物	
IV 蓮華寺庭園の現況調査	10
1. 庭園の概要	3. 庭園の評価と価値
2. 庭園の構成要素	
V 総 括	14
1. 蓮華寺跡の遺構と遺物	2. 弥生時代の集落

巻末図版

挿図・表目次

第1図 調査区位置図.....	2	第7図 庭園内塚平面・立面図.....	11
第2図 遺跡分布図.....	4	第8図 庭園測量図.....	12・13
第3図 遺跡周辺地形図.....	4	第9図 蓮華寺跡採集遺物.....	14
第4図 範囲確認調査・工事立会平面図、 土柱状図.....	6	第1表 調査結果一覧表.....	9
第5図 出土遺物①.....	7	第2表 遺物観察表.....	9
第6図 出土遺物②.....	8	第3表 樹木一覧表.....	13

写真図版一覧

- 写真図版1 (調査地全景)
 調査地全景
- 写真図版2 (範囲確認調査・工事立会)
 範囲1~4区、立会1~5区
- 写真図版3 (庭園)
 庭園全景
- 写真図版4 (庭園・その他)
 枯滝石組・橋2、橋1、庭園全景、築山・塚、
 塚内部、五輪塔、棚橋経塚
- 写真図版5 (遺物)

I 前 言

1. 調査に至る経緯

三重県度会郡度会町棚橋に所在する蓮華寺跡は、10世紀末の創建と伝えられ、伊勢神宮（皇大神宮）大宮司・祭主大中臣氏のもと、平安後期から南北朝期にかけて盛えた、南伊勢を代表する寺院跡である。室町時代に衰微して江戸時代に復興し、現在は本堂と觀音堂などの小堂、小さな庭園を残すのみとなつていている。昭和初期に鈴木敏雄氏により表面採集遺物や出土遺物が紹介されたことでも知られている。

調査の原因となつた一級水系宮川水系止山東谷通常砂防事業は、蓮華寺背後の小谷に砂防ダムを設け、土石流などの土砂災害から下流部に存在する人家、耕地、公共施設等を守ることを目的とした事業である。事業期間は平成31年度から令和3年度で、谷部の堰堤工・流路工と山地根部の管理用道路工からなる（第1図）。平成30年度の公共事業照会において本事業が協議の対象となり、平成31年1月に現地の分布調査を実施したところ、地表に中世の陶器や瓦などの遺物散布が認められたため、直ちに遺跡発見の手続きを行い、埋蔵文化財包蔵地としての保護を図ることとした。遺跡の範囲は度会小学校（旧内城田小学校）校地から蓮華寺西側の内城田神社境内を含む段丘面一帯である。

2. 調査の経過

（1）範囲確認調査

範囲確認調査は工事用進入路の切土部分（1区）、管理用道路のうち側溝・集水溝や擁壁、コンクリート舗装等の恒久的構造物が設置される部分（2～4区）を対象に実施した（第1図）。現在の本堂及び庭園付近の進入路は盛土による仮設道で、工事後撤去されることから調査対象とはしていない。また、堰堤工・流路工は遺跡の範囲外であることや、軟弱な谷地で重機進入が困難であったため調査対象から外した。範囲確認調査は平成31年4月17・18日に実施した。

調査の結果、1区、4区で遺構・遺物が確認され、

現境内の大半に遺構が残存していると判明した。1区の切土は遺構面に達しないため慎重工事指示、4区は盛土・側溝部分を慎重工事、集水溝設置部分を工事立会対応とした。一方、2区、3区は昭和50年代の墓地造成により著しく改変され、遺構は残存していないと判断した（第1表）。

（2）工事立会

工事立会は、範囲確認調査を実施した集水溝設置部分（立会1～3区）の他、電柱移設（4区）や山地根部の切土時（5区）でも立会を実施した。立会は令和元年5月8日から同6月6日にかけて行った。

（3）庭園の現況調査と測量

本堂の背後にある蓮華寺庭園は作庭年代が不明であるが、県内に現存する近代以前の寺院庭園として数少ないものである。今回の砂防工事による地下遺構への影響はないが、庭園北側の擁壁根部に盛土のうえ側溝が新設され、庭園の現状が一部変更されることとなった。また、現在庭園は荒廃しており今後滅失のおそれが高いため、所有者の承諾を得て平成31年4月24・25日に現況調査と測量を実施した。

3. 文化財保護法にかかる諸手続

本発掘調査に伴う法規上の手続きは以下の通り。

①文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項

（土木工事等のための発掘に関する通知）

・平成31年3月15日付、伊建第1587号

（県教育長あて県知事通知）「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の通知書」

②文化財保護法第100条第2項

（文化財の発見・認定通知）

・令和元年8月5日付、教委第12-4408号

（伊勢警察署長あて県教育長通知）

「埋蔵文化財の発見について（通知）」



第1図 調査区位置図 (1:1,000)

II 位置と環境

1. 遺跡の位置と地形

度会郡度会町は南北に細長く伸びた三重県の中央に位置する。旧伊勢国の南端にあたり、北は山地を挟んで多気町・玉城町、東は横川村付近で伊勢市、西は大台町・大紀町、南は南伊勢町と接する。度会町の中央を東流する宮川は、紀伊山地の日ノ出岳に源を発し、幹川流路延長91km、伊勢市大湊で伊勢湾に注ぐ旧伊勢国最大の河川である。宮川は万葉集には「度会の大川」などと記された名所であり、神宮神域との境界でもあった。

遺跡付近は地質上、中央構造線の外帯に属する。山地の基盤岩は泥質片岩で、宮川左岸には国東山（標高375m）、大日山（標高302m）が南に張り出している。蓮華寺跡（1）の背後には標高102mの独立山塊があり、山頂に蓮華寺城跡（2）が築かれた。

宮川中流域は河岸段丘が発達し、宮川と一緒に瀬川との合流点付近は平地が広がる。一方で蓮華寺跡の付近では山地が宮川に迫り、段丘が狭隘である。

縄文時代の遺跡は、発掘調査された森添遺跡（7）の他、下久具万野遺跡で遺物の散布が知られている。弥生・古墳時代の顕著な遺跡はないが、蓮華寺に隣接する度会小学校（旧内城田小学校）が昭和初期に校地を拡張した際、蓮華寺境内から「相当量の弥生式土器」が発掘され、また「内城田神社県道南方地」で弥生土器が出土したといい¹¹⁾、蓮華寺付近に後～終末期の集落が存在することは特筆される。

度会郡はいわゆる神三郡のひとつで、古代・中世には神宮の強い影響下にあり、棚橋・牧戸・大野木・葛原は大橋御園に含まれた。玉城町岩出には神宮祭主の館が営まれ、岩出遺跡群（15）はその関連遺跡と考えられている。この他、宮川流域には多くの中世墓や経塚が造営され、蓮華寺跡の付近では五輪塔の小姫塚（4）、上部積石の棚橋経塚（5）がある。また蓮華寺庭園内にも塚跡があり、境内（旧内城田小学校地）からも平安末～鎌倉時代の蔵骨器（涅美産広口瓶か）が出土している（第V章参照）。

南北朝期以降は蓮華寺城跡（2）を始め多くの城

館が築かれ、各勢力が入り乱れて廟を争った。

2. 蓮華寺の沿革⁽²⁾

康永3年（1344）の「法楽寺文書紛失記」によれば、蓮華寺は一条天皇の頃（10世紀末）に神宮大宮司大中臣宗幹の娘敦子の夫興胤の建立といい、寺領として大橋御園を有した。平安末から鎌倉時代初頭には、神領は度々武士の乱入を受けており、文治年間には蓮華寺も武士や地頭の狼藉を受け衰えた。

13世紀後半頃、蓮華寺は最盛期を迎える。僧通海は神宮祭主大中臣隆道の子で、私領を施入するとともに、天皇の輪旨を得るなど寺勢回復に努めた。また、寺号を大神宮法楽寺と改め、伊勢・志摩2国に多くの寺領と末寺を有し隆盛の極みに達した。境内の五輪塔は鎌倉期石塔の優品であり、通海の供養塔と伝えられる。通海の死後嘉元3年（1305）頃、法楽寺及び寺領は全て醍醐寺三宝院門跡に入る。

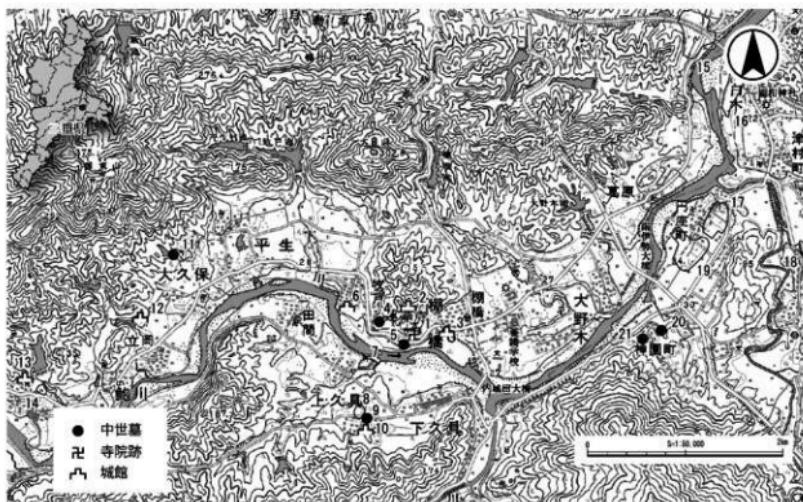
建武3年（1336）、法楽寺は北畠親房の伊勢進出に応じた南朝勢力の軍門に降り、背後の山上には蓮華寺城が築かれ、法楽寺は東の田丸城（玉城町）、南の一之瀬城とともに南朝方的一大拠点となった。北朝方はその奪還のためしばしば法楽寺を攻め、興国3年（1342）、仁木義長の大軍が南勢の諸城を攻略し、法楽寺も奪還した。これらの戦乱で伽藍・寺宝・文書は失われ、以後、法楽寺は北朝勢力下に入り、本寺である醍醐寺の強い支配を受けたようである。応永年間（15世紀初頭）には法楽寺に関する所領争いの文書もみられるが、寺領の大橋御園の名は消え、戦国期には衰退廃絶した。

近世にはわずかに阿弥陀堂を残すのみであったところ、伊勢山田の梅香寺の末寺として享保2年（1717）に再興、宝曆10年（1760）までに本堂・鐘楼・観音堂等を建立し、寺号も当初の蓮華寺に復して現在に至っている。

註

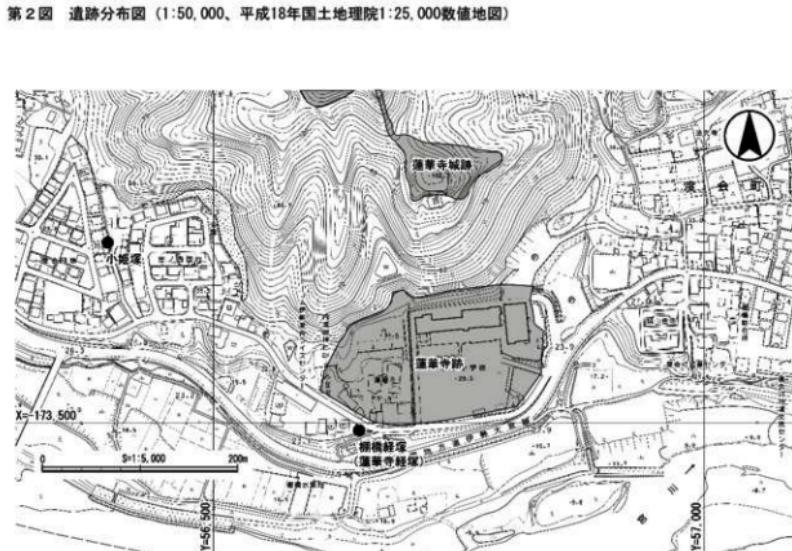
（1）鈴木敏雄『度会郡内城田村考古誌考』1939年。

（2）平松令三編『三重県の地名』平凡社、1983年。



第2図 遺跡分布図 (1:50,000、平成18年国土地理院1:25,000数値地図)

1. 蓮華寺跡 2. 蓮華寺城跡 3. 城山城跡 4. 小姫塚 5. 棚橋跡塚（蓮華寺跡塚） 6. 牧戸城跡
 7. 森派遺跡 8. 寺垣外遺跡 9. 東畠中世墓 10. 山川城跡 11. 岡部経塚 12. 立岡城跡
 13. 長原城跡 14. 野田遺跡 15. 岩出遺跡群 16. 中ノ垣外遺跡 17. 中道遺跡 18. 下冲遺跡
 19. 塚の上遺跡 20. 烏のむしょ塚中世墓 21. 里中世墓



第3図 遺跡周辺地形図 (1:5,000、三重県共有デジタル地図2020)

III 遺構と遺物

1. 範囲確認調査（第4図）

1区 山門西側の調査区である。表層（盛土）下に黒ボク土（3・4層）が厚くみられ、現地表下110cm（標高30.2m付近）で段丘堆積物である黄褐色粘質土（5層）に達する。この上面で溝1条・ビットを検出した。遺構の埋土は黒ボク土と同質の黒褐色シルトである。4層中に弥生後期の台付甕（2）や平安時代末期のロクロ土師器皿（3）が認められたことから、この時期の遺構である可能性が高い。

近代常滑甕（1）は3層上で確認したもので、付近が住宅地として利用されていたことを示す。

2・3区 墓地北側の山地裾部である。昭和50年代の墓地造成で地形が大きく改変されている。調査の結果、山地斜面は表土直下、墓地は現地表下100～120cmで基盤層に達した。遺構・遺物は認められなかった。これらの状況から、墓地造成時の盛土・切土により遺構は滅失したと判断した。

4区 墓地西側の山地裾部である。3層は近世瓦を含む盛土で、その下に旧表土（4層）が薄くみられる。現地表下80～110cm（標高34.6m前後）で基盤層である砂礫層に達し、高さ30cm程の段状地形、ビットを確認した。段状地形は人為的な整地によるものと推測される。4層から中世の土師器片（4）が出土した。これらの状況から、墓地西側においては遺構が良好に残っている可能性が高い。

2. 工事立会（第4図）

1～3区 墓地西側の集水構設置箇所で、今回の施工深度では遺構面に達しなかった。盛土（3層）から中近世の瓦、旧表土とみられる4層から中世の土師器皿（15～19）が出土している。

4区 谷部の電柱移設箇所で、建柱車による掘削時に層序の確認と遺物回収を行った。工事前の地表より約130cmまで湿地状の軟弱な堆積（灰色粘土質シルト）がみられ、掘削深220cmで基盤層に達した。湿地状堆積から、平瓦（21）や鎌倉末～南北朝期の山茶碗（20）が出土している。

5区 谷に接した山地裾部で、表土直下で岩盤となつた。遺構・遺物はみられなかった。

3. 出土遺物（第5・6図）

出土遺物は表面採集を含めコンテナ3箱分である。土器・陶器 2は弥生土器台付甕で、外面は板状工具による調整である。3は平安後～末期のロクロ土師器皿。中世の南伊勢系土師器⁽¹⁾（4・15～19）はすべて皿で、小片も含め鍋類は出土していない。4のみ中世III期で、その他は中世II期のもの。15は灯火具として使用されている。山茶碗⁽²⁾は渥美第8型式（20）の他、第4型式（26）がある。

瓦 大半が近世瓦を含む盛土から得られたもので、中世瓦と近世以降の瓦との厳密な識別は難しく、比較のため両者とも図示した。中世瓦として抽出できる丸瓦は、凹面のコビキA（24・32）、布目や繩叩き（23）を残し、重厚である。焼は弱いかはほとんどない。軒丸瓦は厚手の5・22が候補で、瓦当接合部の刻みはない。平瓦は灰色軟質の21のみである。庭園表採の33は博であり、色調は灰色である。

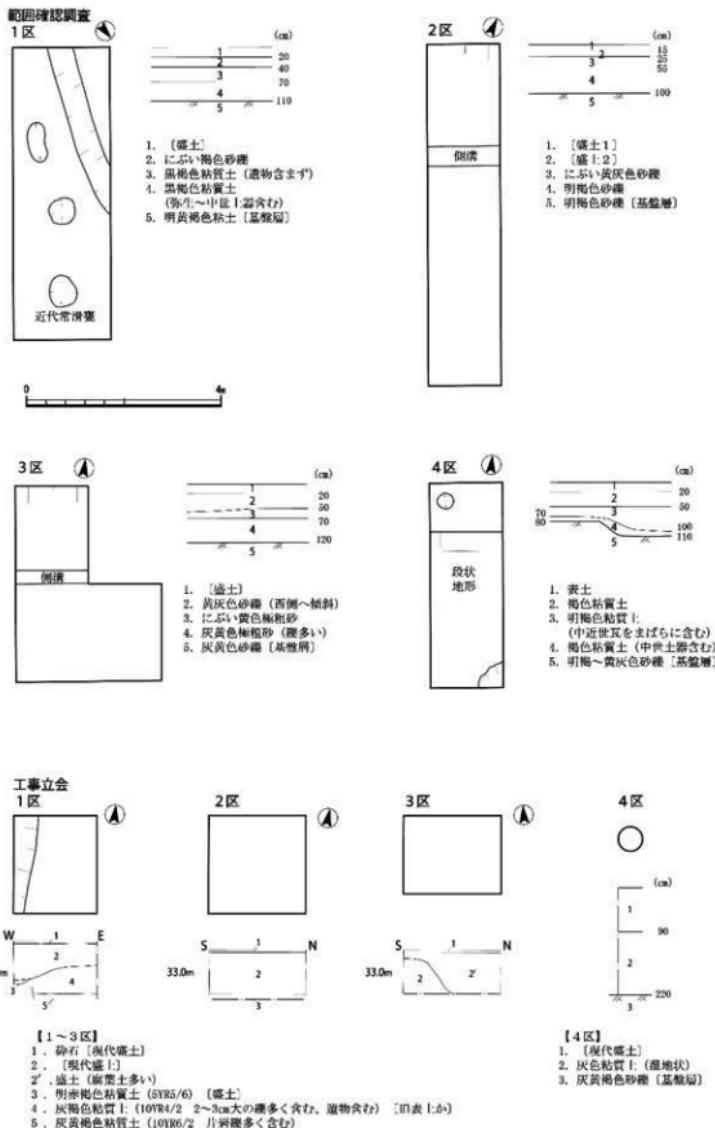
近世以降の瓦は、凹面のコビキBや棒叩き（14）、端面部取りがなされ、焼しがり薄手で軽い。平瓦は凹面をナデで仕上げ、凸面には台痕痕が残る。軒丸瓦（27～30）は輪線が消失し、巴文は長い。宮川流域では玉城町岩出跡群や大紀町野添大辻遺跡に類似がある⁽³⁾。瓦当貼付けは刻みによる。これらは蓮華寺復興後の瓦であろう。

註

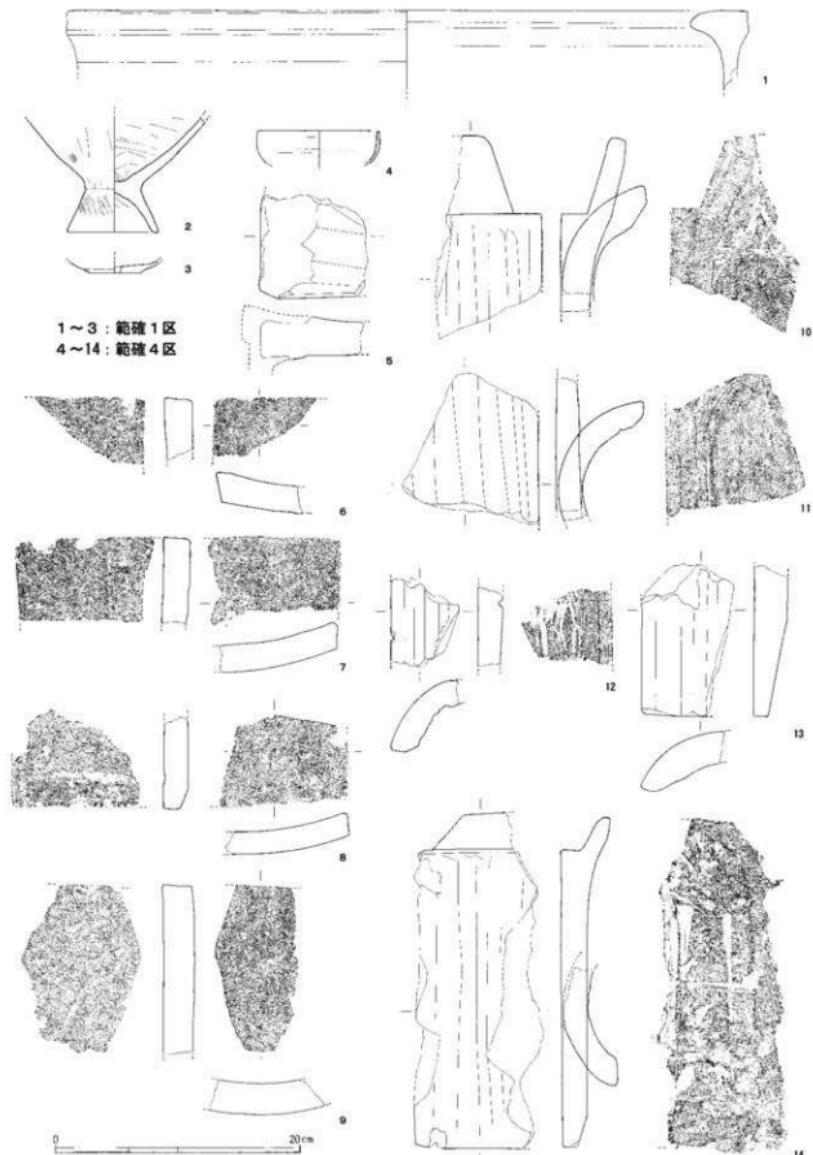
(1) 伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古2、三重県、2008年。

(2) 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』3、三重県埋蔵文化財センター、1994年。

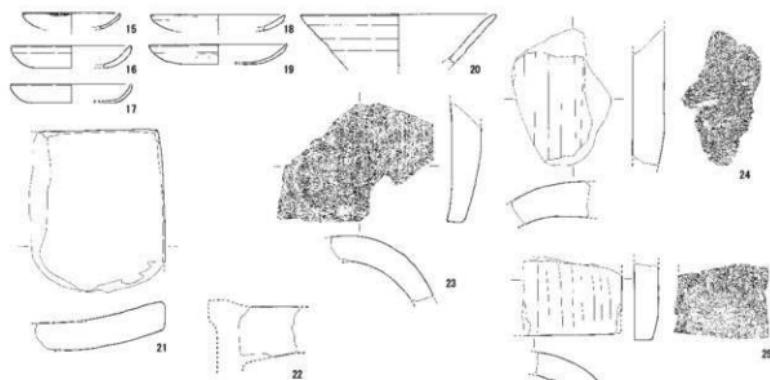
(3) 三重県埋蔵文化財センター『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』1995年/同『野添大辻遺跡（第2次）発掘調査報告』2015年。



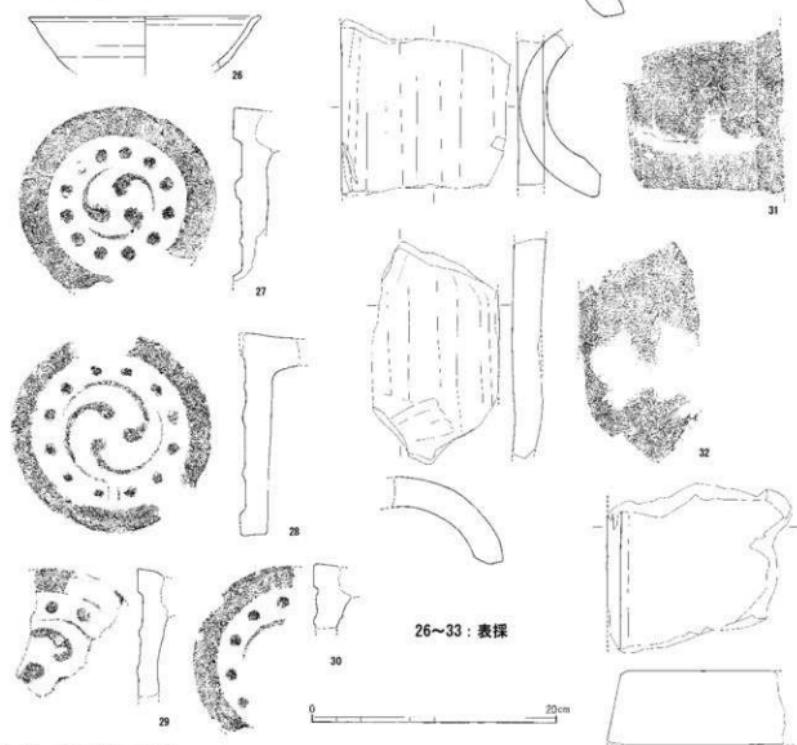
第4図 範囲確認調査・工事立会平面図、土層柱状図 (1:100)



第5図 出土遺物① (1:4)



15~25 : 立会調査区



26~33 : 表探

第6図 出土遺物② (1:4)

第1表 調査結果一覧表

調査坑	包合層 上面深さ	造構 上面深さ	造構	遺物	備考
範囲1区	—	110cm	唐 ビット	弥生土器 中世土師器	慎重工事(造構面に達しない)
範囲2区	—	—	なし	なし	墓地造成時に改変 施工可(慎重工事)
範囲3区	—	—	なし	なし	墓地造成時に改変 施工可(慎重工事)
範囲4区	70~100cm	80~110cm	段状地形 ビット	瓦 中世土師器	慎重工事(造構面に達しない) 集水樹は工事立会

調査区	施工内容	備考
立会1区	集水樹	GL-90cmまで削削、造構面に達せず(包含層遺物回収のため一部掘り下げる)
立会2区	集水樹	GL-90cmまで削削 造構面に達せず
立会3区	集水樹	GL-90cmまで削削 造構面に達せず
立会4区	電柱移設	GL-220cmまで削削 遺物あり
立会5区	管理用道路 盛土・切土	表土直下で岩盤露出 造構・遺物なし

第2表 遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	埋積 (產地・系統)	器種	調査区	造構 層位	部位 残存度	法量(cm)			特記事項
							口径	底径	器高	
1	005-01	陶器 (奈良)	甕	範囲1区	にぶい褐色シルト	口縁部	55.6	—	6.5	橙
2	003-02	弥生土器	台付甕	範囲1区	黒褐色粘質土	脚部底部 10/12	9.5	7.3	9.5	にぶい 黄褐
3	002-02	口クロ土師器	瓶	範囲1区	黒褐色粘質土	底部 10/12	—	4.2	—	橙 底部赤切痕
4	005-02	土師器 (南伊勢)	瓶	範囲4区	褐色粘質土	1/12	9.8	—	2.8	浅黄褐
5	004-02	瓦	軒丸瓦	範囲4区	明褐色粘質土	小片	—	—	2.9	灰
6	001-02	瓦	平瓦	範囲4区	明褐色粘質土	小片	—	—	厚2.3	灰
7	001-01	瓦	平瓦	範囲4区	明褐色粘質土	小片	—	—	厚2.3	灰
8	003-01	瓦	平瓦	範囲4区	明褐色粘質土	小片	—	—	厚2.0	灰
9	002-01	瓦	平瓦	範囲4区	明褐色粘質土	小片	—	—	厚2.5	灰
10	004-01	瓦	丸瓦	範囲4区	明褐色粘質土	小片	—	—	厚2.5	灰
11	002-03	瓦	丸瓦	範囲4区	明褐色粘質土	小片	—	—	厚2.0	灰
12	001-03	瓦	丸瓦	範囲4区	明褐色粘質土	小片	—	—	厚2.0	オリーブ 灰
13	003-03	瓦	丸瓦	範囲4区	明褐色粘質土	小片	—	—	厚2.6	オリーブ 灰
14	006-01	瓦	丸瓦	範囲4区	明褐色粘質土	8/12	長27.5	—	厚2.1	灰
15	008-06	土師器 (南伊勢)	瓶	立会1区	灰褐色粘質土	1/12	7.9	—	1.2	浅黄褐
16	008-04	土師器 (南伊勢)	瓶	立会1区	灰褐色粘質土	1/12	9.8	—	1.8	浅黄褐
17	008-05	土師器 (南伊勢)	瓶	立会1区	灰褐色粘質土	1/12	9.8	—	1.5	浅黄褐
18	008-07	土師器 (南伊勢)	瓶	立会1区	灰褐色粘質土	1/12	10.9	—	1.3	橙
19	007-03	土師器 (南伊勢)	瓶	立会1区	灰褐色粘質土	1/12	11.2	—	1.6	浅黄褐
20	008-02	山茶碗 (韮先)	椀	立会4区	灰褐色粘土	口縁部 2/12	15.8	—	4.3	灰白
21	008-01	瓦	平瓦	立会4区	灰褐色粘土	小片	—	—	厚2.4	灰白
22	007-02	瓦	軒丸瓦	立会1区	灰褐色粘質土	小片	—	—	厚4.0	淡黄
23	010-01	瓦	丸瓦	立会1区	灰褐色粘質土	小片	—	—	厚2.5	灰
24	007-04	瓦	丸瓦	立会1区	灰褐色粘質土	小片	—	—	厚2.7	灰
25	006-02	瓦	丸瓦	立会1区	灰褐色粘質土	小片	—	—	厚2.0	灰
26	012-01	山茶碗 (韮先)	椀	表探	庭園付近	口縁部 8/12	18.6	—	4.4	灰白
27	010-03	瓦	軒丸瓦	表探	庭園付近	瓦当	径16.0	—	厚2.7	灰
28	010-01	瓦	軒丸瓦	表探	庭園付近	瓦当	径16.7	—	厚2.1	灰
29	012-02	瓦	軒丸瓦	表探	庭園付近	瓦当	—	—	厚1.5	灰
30	010-02	瓦	軒丸瓦	表探	庭園付近	瓦当	—	—	—	接合部に割み
31	011-01	瓦	丸瓦	表探	庭園付近	小片	—	—	厚2.0	灰
32	013-01	瓦	丸瓦	表探	本堂付近	小片	—	—	厚2.2	黄灰
33	009-01	土製品	磚	表探	庭園付近	小片	—	—	厚6.0	灰

IV 蓮華寺庭園の現況調査

1. 庭園の概要

蓮華寺庭園は、本堂の北側にある長約20m、幅約12mの小規模な池庭で、文化財指定はされていない。庭園の存在自体があまり知られておらず、これを取り上げた文献や資料は鈴木敏雄『度会郡内城田村考古誌考』⁽¹⁾のみである。それによると、昭和14(1939)年当時「水アリテ風趣深し」とい、北側の谷から道水による池庭であったと推測される。その後、谷は溜池となり、境内北側が昭和50年代に墓地に変更、池の北岸が失われた。これらにより水系が途絶え、池が干上がって荒廃した。なお、住職によると昭和50年代の改変前と庭園の規模はさほど変わらないといい、元々大規模な庭園ではなかったらしい。

2. 庭園の構成要素

(1) 地割（第8図、写真団版4）

庭園は北方の山地を借景とし、山裾に沿ってU字形の池（南北16m以上、東西15m以上）を配置する。池の中央には長楕円形の中島が配され、中島の南西には円形の出島がある。東側の池岸は岬状に突出し、中島と岬は石橋で結ばれる。出島は橋がなく独立している。橋の他に石造物はない。

中島の南端には溝状の回みと護岸があり、付近の景石とともに枯滻石組を構成したとみられる。

島・枯滻石組・橋・岬等の位置や、後述する景石配置の偏りから、本庭園は池の南へ南東側からの眺望を意識して作庭されたものと考えられる。

(2) 島・築山・石組・石橋

島 中島は東西長約5.5m、南北長約8.5mの長楕円形、高さ約1mの島で、南側を高くする。出島は径約2mの円形で、現状高さはほとんどない。

築山 直径約2m、高さ約1m、裾部は板石を立て、その内側を盛り上げて築山としている。築山上にはコケが配される。

石組 景石・石組はすべて宮川流域で産する石英片岩（白石）の削石である。中島の護岸および隣部には、伏石などの景石がみられる。中島の南岸・東岸

では、長径1mほどの大きめの景石が用いられるが、西岸・北岸は小ぶりの石でやや直線的な護岸となっている。池岸の護岸は多くが欠落しているとみられるが、大ぶりの景石が南岸・東岸にみられる。

石橋 2ヶ所あり、ともに削石を削り出したアーチ形の反橋である。橋1は長さ約2m、幅約1m、反りはやや軽い。現状、中央に亀裂が入っている。

橋2は枯滻石組の付近にあり、長さ約1m、幅約40cmの小ぶりのもので、反りは強い。

(3) 塚（第7図）

中島には、塚の下部構造（板石積み、長径約1mの梢円形、深さ約1m）が残る。板石はすべて基盤岩の泥質片岩で、壁面は概ね直立するが、北側のみ若干持ち送りされている。

鈴木敏雄によると、昭和14年当時は「大石数個ヲ積上ケテ高約五尺」、積石の隙間から茶褐色の藏骨器（高さ約二尺五寸）と骨灰が確認できたといい、下部構造は閉塞されていなかったようである。また、藏骨器を室町期のものとしている。南伊勢では17世紀以降、明治まで土葬が一般的となることから⁽²⁾、この塚が中世墓である蓋然性は高い。

現在、塚の上部構造はなく藏骨器は抜き取られ、下部構造の大半は埋没している。なお、鈴木の記述から、上部構造は蓮華寺山門前の棚橋經塚（写真団版4）に類似するものと考えられる。

下部構造の板石は、一部が石英片岩の景石と互層になるものがある。また、築山の盛土中に塚の板石と同様の板石片が混じる。これらが庭園の造営・改変・昭和以降の藏骨器抜き取り時のどの時点で生じたかは確定できず、庭園と塚の造営が同時期である可能性も否定できないが、作庭にあたり既存の塚を庭園の意匠に取り込もうとしたこと、作庭時期が塚の造営時期を遙らぬ点は確実であろう。

(4) 植栽

植栽は低木の若木が中心で、いずれも近年補植されたものや実生木を整理したものであろう。中島・築山にはチャノキが多く、若干ツバキが植えられている。東側の池岸にはごく若いイロハモミジが數本

植えられている。築山にはコケがみられる。

3. 庭園の評価と価値

(1) 作庭年代の推定

現状で本庭園は荒廃しており、作庭年代を確定するためには、歴史資料や発掘調査による検証をする。しかしながら、以下の点から、庭園の作庭時期は蓮華寺が山田梅香寺末寺として復興した享保～宝暦以降とみるのが妥当であろう。

- ・現本堂、庫裏からの眺望を意識した地割や石組
 - ・反りの強いアーチ形の石橋。一般にアーチ橋は近世に中国から技術輸入されたとされ⁽³⁾、県内でも石造アーチ橋は瑞巌寺庭園（松阪市）、聖宝寺庭園（いなべ市）など近世庭園にみられる。
 - ・既存の塚（中世墓か）を意匠に取り込んでおり、作庭時期は塚の造営時期を過らない。
- なお、本庭園のように枯滝石組や出島が地方の小規模庭園において定型化する背景には、戦国末期に完成した作庭技術が、江戸中期の北村援琴『築山庭造伝』（1735）等の作庭書を通じ地方へ普及したことがあつたといい⁽⁴⁾、この点も作庭年代を考える上で考慮する必要があろう。

(2) 庭園の特徴と価値

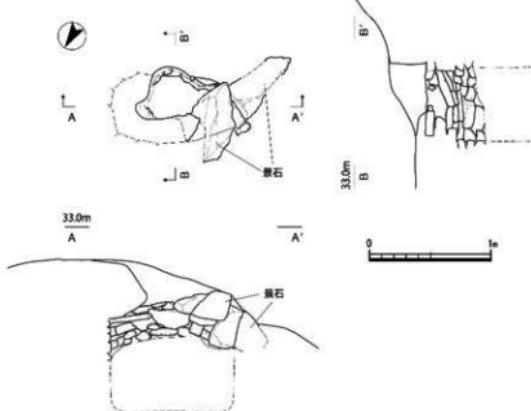
既存の塚を庭園の景観に取り込んだ中島は他に類例がなく、本庭園の大きな特徴である。

さらに、宮川流域に所在する庭園として、以下の地域的特色が認められる。

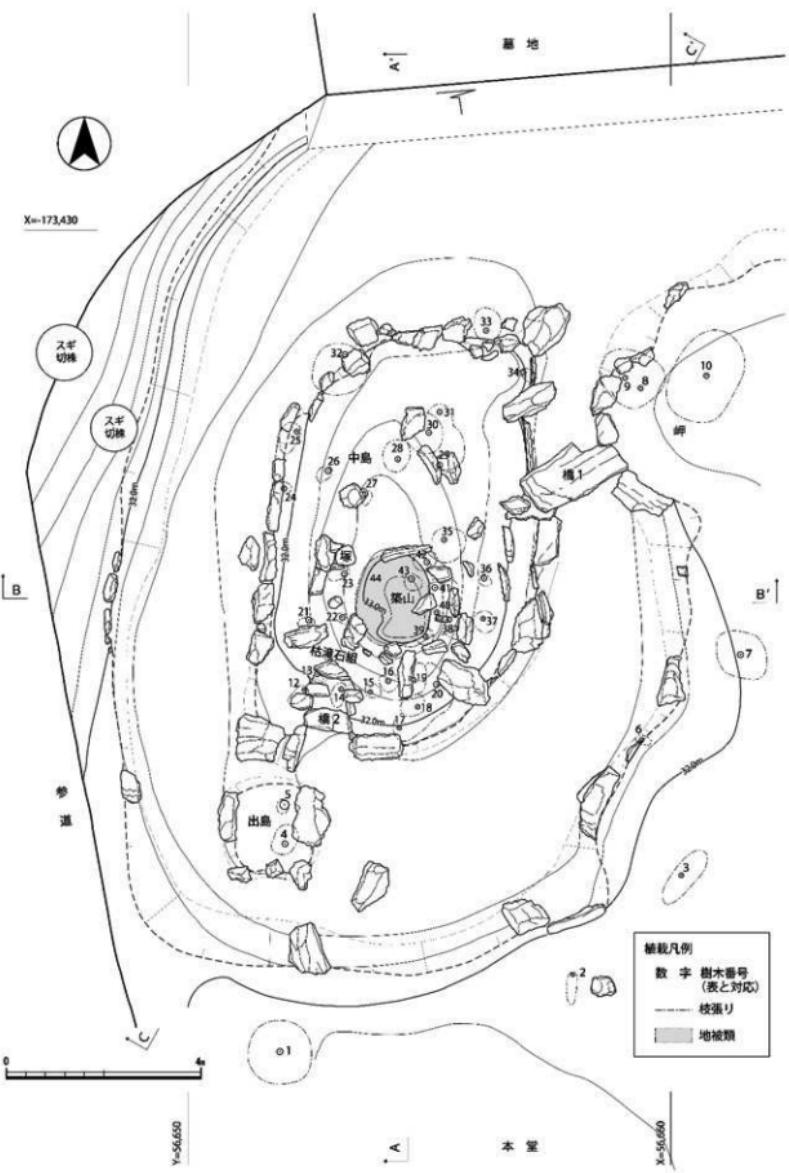
- ・周辺で栽培が盛んなチャノキを主体とした、照葉樹の低木からなる植栽
 - ・宮川流域で産する石英片岩を用いた石組・石橋
- 本庭園は、全国的視野でみれば規模や意匠において傑出した内容を持つものとはいえないが、県内に残る寺院付属の近世池庭は、専修寺庭園（津市）、本楽寺庭園（多気町）、瑞巌寺庭園（松阪市）、聖宝寺庭園（いなべ市）、興正寺庭園（四日市市）など数例しかない。本庭園は県内の庭園文化の発展過程を知る上で貴重であり、何より宮川流域の地域史上重要なものといえよう。

註

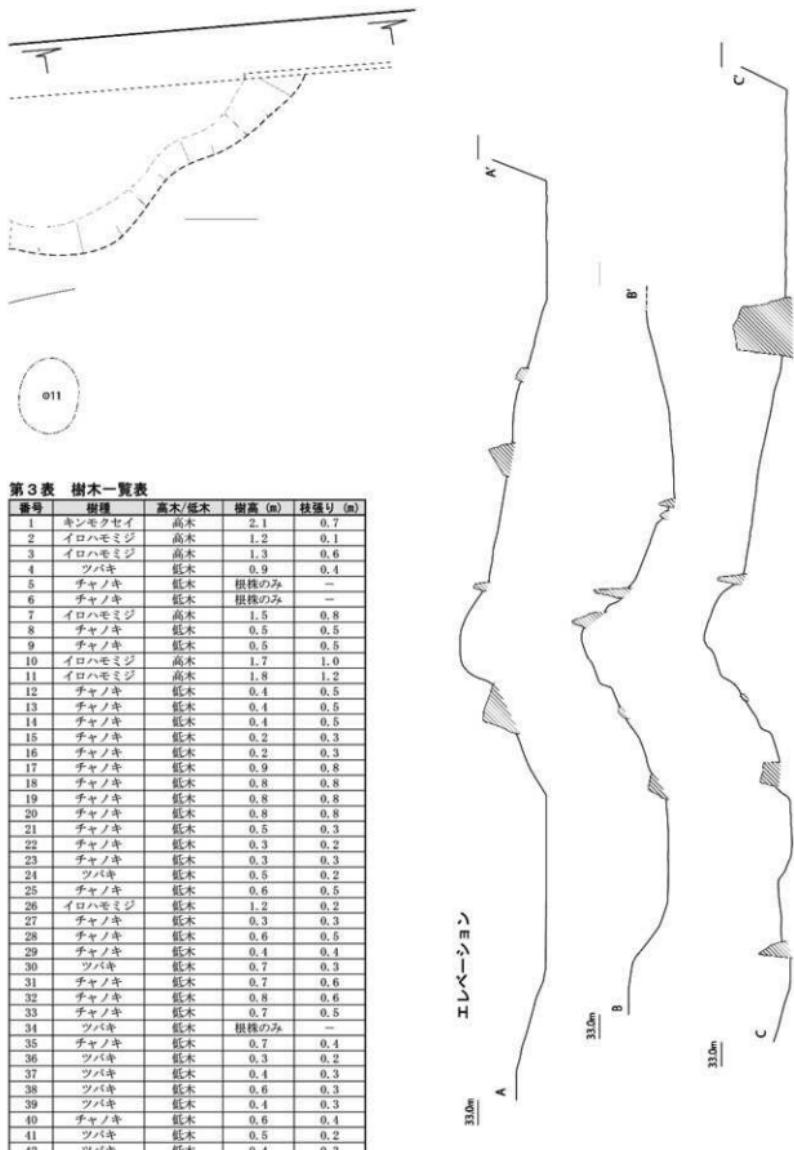
- (1) 鈴木敏雄「蓮花寺ト其遺品」『度会郡内城田村考古誌考』1939年。
- (2) 濱千代早由美「三重県の墓制」『三重県史』民俗、三重県、2012年。なお、県内の中世墓の動向は、竹田憲治氏の教示を得た。
- (3) 太田博太郎「はし」『国史大辞典』吉川弘文館、1990年。
- (4) 高橋知奈津氏（奈良文化財研究所文化遺産部整備研究室、三重県文化財保護審議委員、庭園史）の教示による。景石や石組の評価について多くの教示を得た。



第7図 庭園内塚平面・立面図 (1:40)



第8図 庭園測量図 (1:100)



第3表 樹木一覧表

V 総 括

1. 蓮華寺跡の遺構と遺物

範囲確認・立会調査の結果、現墓地の西側は近世以降の盛土により、中世の遺構や地形が良好に残っていることが判明した。また、蓮華寺山門付近の段丘面でも溝などの遺構を確認することができた。

出土土器の時期は11世紀から14世紀にわたり、文献が伝える蓮華寺(法楽寺)の盛期と概ね合致する。瓦は近世以降の盛土に含まれたものだが、中世に遡るものも含まれる。蓮華寺跡では、既に内外に圓線のある巴文軒丸瓦、界線のある均整唐草文軒平瓦が採集され¹¹⁾、文様や平瓦の頸形態から14世紀までの瓦と考えられる(第9図)。また、埠の存在も指摘されており、今回の表探遺物にも埠があることから、埠積みないし埠敷きの遺構が存在した可能性が高い。

このように、断片的ながらも蓮華寺境内の中世遺構・遺物の遺存状況が判明した点は重要である。

加えて、庭園の現況調査を通じ、庭園中島にある塚の詳細を把握することができた。塚は藏骨器を有す

る中世墓とみられ、境内ではこれと別の藏骨器が出土している(第9図)。蓮華寺山門の南にある棚橋経塚も、藏骨器を埋納した中世墓の可能性があろう。これから、現本堂付近の段丘面に墓地があったことも考えられ、将来的な発掘調査によって寺域や伽藍配置、空間利用等を検討していく必要がある。

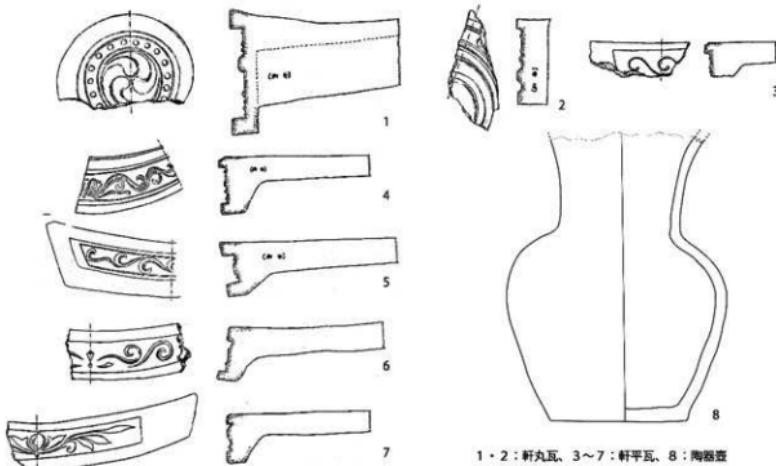
2. 弥生時代の集落

第二章でも触れたように、過去、蓮華寺境内や内城田神社の南側で相当量の土器が出土したといい、今回も弥生時代後期から終末期の土器が得られた。現状で遺物の分布域は直径約100mにわたっており、付近の段丘面に弥生集落が存在したと考えられる。

宮川中流域の河岸段丘では、弥生時代の遺跡はほとんど知られていない。こうした中にあって、今回の調査成果は貴重なものといえよう。

註

- (1) 鈴木敏雄「蓮花寺ト其遺品」『度会郡内城田村考古誌考』1939年。



第9図 蓮華寺跡探集遺物(縮尺任意、註1文献より引用、一部トレース)

写 真 図 版



蓮華寺境内（南から）

写真図版1（調査地全景）



調査地全景（北から）



同（南から）

写真図版 2
(範囲確認調査・工事立会)



範確 1 区（北東から）



範確 2 区（南東から）



範確 3 区（南から）



範確 4 区（南から）



立会 1 区（東から）



立会 2 区（東から）



立会 3 区（北から）



立会 4 区（南から）



立会 5 区（東から）



立会 5 区（南から）



庭園全景（南から）



同（南西から）

写真図版4
(庭園・その他)



枯滝石組・橋2（南から）



築山・塚（西から）



塚内部（西から）



橋1（東から）



五輪塔（東から）



庭園全景（北から）



樅橋経塚（北から）



報告書抄録

ふりがな	れんげじあとはつくちょうさほうこく								
書名	蓮華寺跡発掘調査報告								
副書名									
卷次									
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	396								
編著者名	櫻井拓馬								
編集機関	三重県埋蔵文化財センター								
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596 (52) 1732								
発行年月日	2020(令和2)年12月23日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
れんげじあと 蓮華寺跡	わせふじいとく	度会郡度会町棚橋	24470	156	34度 26分 06秒	136度 25分 21秒	20190417 ～ 20190614	86m ²	砂防ダム建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
蓮華寺跡	寺院跡	平安～室町	ピット・溝 段状地形		土器・陶器 瓦				
要約	<p>蓮華寺跡は、10世紀末頃の創建と伝えられ、伊勢神宮大宮司・祭主大中臣氏のもと、平安後期から南北朝期にかけて盛えた、南伊勢を代表する寺院跡である。</p> <p>砂防工事に伴う範囲確認調査の結果、現地表下約1mで遺構面に達し、溝やピット、段状地形などの遺構を確認した。また範囲確認・工事立会では11～14世紀にかけての土器や中世瓦が出土した。これらから、現在の蓮華寺境内には、蓮華寺跡に関する遺構・遺物が良好に残存していることがわかった。一方、現在墓地となっている箇所は、昭和50年代の墓地造成時に地形が大きく改変され、遺構は滅失したとみられる。</p> <p>なお、調査に際し、境内にある庭園の現況調査及び測量を行った。庭園は近世以降の造営とみられるが、庭園内には塚の下部構造が遺存しており、昭和初期の記録によると中世墓の可能性が高い。境内では過去に骸骨器が出土しており、現本堂付近に中世墓が点在していた状況がうかがえる。</p>								

三重県埋蔵文化財調査報告 396

蓮華寺跡発掘調査報告

～度会郡度会町棚橋～

2020(令和2)年12月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 共立印刷株式会社

